

<前回>宗教批判の諸問題：フョイエルバッハ

1. 現代キリスト教を規定する問いとしてのフョイエルバッハ問題

フョイエルバッハの宗教批判は避けて通れない

源泉は古代ギリシアの哲学的神話批判、人間が想像した神・神人同型論

→マルクス、ニーチェ、フロイト、キルケゴール

2. フョイエルバッハの宗教批判の二つの前提

①人間の類的本質の無限性

②類的本質の外化(=表現、疎外、投影)

8. バーガー、ルックマンの知識社会学：

外化(表現・創造)→客体化(制度化・実体化)→内化(社会化・自己同一性)

9. 「他者は私の汝であり……私の他なる自我である。それは私にとって対象化された人間、私の頭わにされた内面である。すなわち他者は自分自身を見る目である。私は他者においてはじめて人間性の意識をもつ。他者を通してはじめて、私は私が人間であることを経験し感じるのである」「孤独は思想家の欲求であり、共同は心情の欲求である。人は一人で考えることができるが、愛することができるのはもっぱら二人でなのである。愛においてわれわれは他者に依存している。」(上 163)

↓

我と汝、対話的思考

10. 「宗教は無限者の意識である。したがって宗教は人間が自らの無限の本質についてもつ意識であり、かつそれ以外の何ものでも在り得ない」。「神の意識は人間の自己意識であり、神認識は人間の自己認識である」

11. 「神は人間の鏡である」、「神学の秘密は人間学である」

13. 哲学の課題：このような神と人間の対立が類的本質としての人間と個人としての人間の対立であることを暴露することであり、人間から疎外された人間性を人間の側に取り戻すことなのである

14. 宗教批判(疎外克服のプロセス)は宗教自体に内在するメカニズムである。

先行する宗教への批判は、当初は無神論とされた。

15. 批判的コメント

①フョイエルバッハによって批判された神

人間の無限の類的本質が人間と対立するものとして人間の外に投影されたもの
→人間は無限な自らの本体的人間性の実現を妨げられる、人間のエゴイスティックな幸福衝動の素朴な実体化

最高存在あるいは最高価値として措定された神(形而上学的存在者としての神)

バルト「フョイエルバッハの鋭い感覚は正しい」

「神——少なくとも宗教の神——に対する信仰が失われて行くのはただ、懐疑論・汎神論・唯物論の場合がそうであるように人間——少なくとも宗教において認められているような人間——に対する信仰が失われるところにおいてだけである」、「人間を否認することは宗教を否認することである。」(122)

宗教で問われているのは人間であり、この連関を主題的に取り上げたのがフョイエルバッハである(議論はカント・シュライアマハーに発端をもつ)。

②人間の類的本質の無限性の根拠

「個別的には人間の力は制限されているが、結合されると無限の力となる。個々人の知は制限されているが、理性は制限されておらず、学も制限されていない。なぜなら、それは人類の共同行為だからである」

→近代人の「信仰」(無限の進歩) = 楽観主義・ヒューマニズム

③現代の宗教的・神学的思想は人間の疎外の克服、人間の本来的可能性の実現についてどのように考え、どのように答えているのか

→「投影のメカニズム＝人間の本性」ならば、フィクション機能の積極的意味こそが問われるべきである（ユートピア精神の意義）

④フォイルバッハの宗教批判→マルクスの無神論的な宗教批判（非宗教的宗教批判）
→キルケゴール的な有神論的な宗教批判（宗教的宗教批判）

16. 近藤勝彦『キリスト教弁証学』教文館、2016年。

フォイエルバッハは、神を人間の類的本質の投影として論じ、神学を人間学へ還元する議論を行ったことで知られるが、著者は、それを言わば逆転して次のように論じる。フォイエルバッハが示したのは、宗教的投影が人間の本質を構成する要素であることであつた、と。つまり人間は、その自己超越的精神の本質的構成契機として神的なものとの関係性、宗教的ものの投影や表現の必然性を有する存在者であり、フォイエルバッハの宗教批判は、「人間学的な宗教的アプリアリ」（九五）を主張したものと解し得るのである。

10. 社会矛盾とキリスト教—マルクス主義の意義

1. 「マルクスの宗教批判」の標準的議論

①人間社会に宗教が生じたのは単なる偶然ではない。宗教は欲求の疎外形態における実現（否定的な媒体）であり、人間の現実生活の一契機なのである。

- ・唯物史観：生産力と生産関係の矛盾の弁証法的展開
- ・上部構造と下部構造
- ・個人と共同体

②宗教批判と政治社会批判とは密接に関連

「ドイツにとって宗教の批判は本質的にもう終わっている。そして、宗教の批判は、あらゆる批判の前提である。天上の批判は、こうして地上の批判にかわり、宗教の批判は法の批判に、神学の批判は政治の批判にかわる」（『ヘーゲル法哲学批判序説』）

- ・フォイエルバッハの議論の歴史的事実化

③宗教は人間社会の歴史において必然的に生じたものであるが、その歴史的条件が変化するとき、必然的に終焉を迎えるはずである。

- ・積極的批判と自動的消滅待望。
- ・宗教はアヘンである。

④宗教を不可欠の契機として含まないような現実世界の構築

共産主義社会：非疎外形態における欲求・類的本質の実現→これ自体がユートピアか？
無階級社会
自己止揚・自己否定の契機をマルクス主義自体は内部に組み込んでいるか？

<ヨハネ黙示論 2 1 章>

22 わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが神殿だからである。23 この都には、それを照らす太陽も月も、必要ではない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。

2. 武藤一雄

「単にフォイエルバッハについてのみではなく、マルクス主義の人間観乃至世界観についても、右に述べたキリスト教思想のごとく、人間性の全体を悪とし、或は原罪に即して人

間を見るということがなく、また歴史の全体の根本的な限界ということについて語ることがない。そこにマルクス主義乃至はそれに依って立つところの共産主義の楽天主義・ユートピアニズム・ロマンティズムがあるということがしばしば指摘されるのである。」(49)

「マルクス主義によれば、このような歴史的終末論によって、またそこにおいて実現せられるべき自由社会において、人間性の全体的究極的解放がなしとげられると考えられる。

・・・外延的には一切の社会的悪から、内包的には一切の根元悪から人間性が自由になると解されねばならないから、それは宗教否定に立つ新しい宗教という性格を帯びざるをえない。とにかくマルクス主義は、単に冷厳な社会科学的立場にとどまるというのではなく、宗教を根本的に批判しまた否定することによって、それ自身宗教に代ろうとする一種の信仰告白のごとき意味をもつに至る点に注意されねばならない。」(53)

「社会主義乃至は共産主義が来たるべき社会を絶対化し理想化して描こうとすればする程、それは現実において幻滅を以て酬いられざるをえないのである。それがユートピアニズムの評される所以であろう。」(69)

↓

ティリッヒのユートピア論、あるいは、リクール『イデオロギーとユートピア』によってさらに検討する必要がある。

芦名定道「ティリッヒのユートピア論」(『ティリッヒ研究』第3号、2001年、pp.73-82)。

3. マルクス・エンゲルス再考、マルクスは反宗教的か？

不破哲三

「マルクス、エンゲルスは、唯物論者として宗教批判の多くの文章を書きましたが、歴史家としては、人間社会の精神生活における宗教の役割をきわめて高く評価しました。」

「一八四八年にドイツ革命が起きたとき、マルクス、エンゲルスが革命の要求綱領に書き込んだのは、「国家と教会との完全な分離」でした。」

「キリスト教の歴史」の「分析」、「その歴史論をもっとも詳しく展開したのは、エンゲルスでした。」「一八九四年六月」「原始キリスト教史について」「キリスト教は発生時には被圧迫者の運動であった・・・」「奴隷および被解放奴隷」「貧者および無権利者」

「若い時代に書いた「ドイツ農民戦争」「封建制にたいするブルジョワジーの闘争の歴史」「第一の決戦は、一六世紀の「ドイツのプロテスタント宗教改革」、「カルヴァン主義はオランダに共和国を建設し、イングランドに、またスコットランドに活動的な共和主義の政党を建設した。」「第二の決戦は、イギリスの「ピューリタン革命」、「反封建の三つの「大決戦」の最後が、一七八九年のフランス大革命」「宗教が社会を動かす主要な精神的な力となるという時代は、ヨーロッパに関する限り、この時代をもって終わったといっただいである。」

「マルクス」「『資本論』」「すべての人間に平等の個人として対するプロテスタントが、商品生産の社会では、最もふさわしい宗教だと位置づけたのである。」

「エンゲルス」「救世軍」について、高い評価」

「人間社会がいま直面しているさまざまな問題に対して、多くの宗教者や宗教団体が声を上げ、平和と民主主義を守る社会運動の重要な一翼をにないつつあります。マルクス、エンゲルスが今日のこの状況をみたら、どんな評価と歓迎の声をあげたでしょうか。」「マルクスは、宗教の将来について、・・・未来社会においては、宗教的反映も自然に消滅に向かうだろう、という意味の予想を、しばしば述べました。しかし、私たちは、人間の思想・意識の問題は、もっと複雑な性格をもっていると、考えています。」

↓

このマルクス主義ならば、賀川も連携できただろうか。

柄谷行人

「フランス革命後のヨーロッパの社会主義は大體、キリスト教に由来するものです。」
「彼らが政治的に敗北したからではありません。むしろ、それはある意味で勝利を得たからこそ、消滅したのです。見かけ上では「階級闘争」は続いているかもしれない。労働組合やストライキが合法化されたからです。しかし、それは階級を揚棄（止揚）する階級闘争ではなく、賃金・労働条件をめぐる闘争であって、市場経済の一環にすぎません。つまり、このとき、イギリスでは階級を揚棄（止揚）するような階級闘争、すなわち社会主義運動は消滅したのです。以後、イギリスの社会主義はファビアン主義（社会民主主義）のようなものとなります。」

「実はユートピアや宗教に強い関心を持っていたエンゲルス」「ミュンツァーによる千年王国運動」

「「転覆党」とは原始キリスト教集団のこと」

4. 社会矛盾の批判的理解とマルクス主義。自己批判を媒介して、マルクス主義も進展する、あるいは変わる。キリスト教は？

1970年代以降の西欧のマルクス主義の理論展開を参照すること。

5. ジジエク：ラカン派マルクス主義。

「史的唯物論的分析」、「宗教が、もはや特定の文化的生活形態に完全に組み込まれたり、それと同一化したりするのではなく、自律性を獲得し、その結果、様々な文化にまたがる同じひとつの宗教として生き残ることができるような社会体制——これは、近代のありうべき定義のひとつである。」(8)

「このグローバル体制において、宗教が担いする役割は二つある。治療的役割と批判的役割である」(9)

「問題は、近代という<理性>の時代において、宗教は社会を有機的にまとめるというこの機能をもはや果たすことができない、ということである。今日、宗教がこの力を失い、もはやそれを取り戻すことができないのは、科学者や哲学者のせいだけではない。「普通の」人々という大きな集団のせいでもある」(11)

「キリスト教の転覆力を秘めた核は唯物論アプローチによっても理解できる、ということではない。わたしのテーゼは、それよりもはるかに過激である。つまり、この核は、唯物論的アプローチによってしか理解できない——そして後者は前者によってしか理解できない——ということである。真の弁証法的唯物論者になるためには、キリスト教的な経験を経るべきなのだ。」(13)

↓

キリスト教思想とマルクス主義の新しい関係構築の可能性、宗教社会主義論の再開。

6. 「解放の神学」の試み → 政治神学へ

G・グティエレス『解放の神学』岩波書店、1985年（1972年）。

「実践に重点をおき、世界の改造を志向する「マルクス主義思想」の影響がある」。「現代神学は、自らが実際に、マルクス主義との実り多い対決のただ中にあることを知るのである。そして、現代神学が、自らの思想の源泉を探って、この世の変革と歴史の中での人間の行動の意義を考えはじめたことについては、マルクス主義に負うところが大きいのである。」「マルクス主義との対峙が役立つのである。」(12)

<参考文献>

1. マルクス・コレクション（筑摩書房）

- ・『デモクリオトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異、ヘーゲル法哲学批判・序説、ユダヤ人問題によせて、経済学・哲学草稿』
- ・『ドイツ・イデオロギー（抄）、哲学の貧困、コミュニスト宣言』

2. 岩波文庫
 - ・『ユダヤ人問題によせて、ヘーゲル法哲学批判序説』(城塚登訳)
 - ・『経済学・哲学草稿』(城塚登・田中吉六訳)
 - ・『ドイツ・イデオロギー』(三木清訳)、『ドイツ・イデオロギー』(古在由重訳)
 - ・『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』(廣松渉編訳、小林昌人補訳)
3. レーヴィット 『ヘーゲルからニーチェへ』岩波書店。
4. 都留重人 『マルクス』講談社。
5. 津田雅夫 『マルクスの宗教批判』柏書房。
6. スラヴォイ・ジジェク『操り人形と小人 キリスト教の倒錯的な核』青土社。
7. リクール『イデオロギーとユートピア』新曜社。
8. 『福音と世界』2018.5、
 - 特集「マルクス主義とキリスト教——マルクス生誕200年に考える」
 - 不破哲三「マルクス、エンゲルスの宗教観について」
 - 柄谷行人「エンゲルスとキリスト教」
9. 武藤一雄『宗教哲学』日本YMCA同盟出版部、1955年。
 - 第一章 宗教とマルクス主義
10. Roland Boer, *Lenin, Religion, and Theology*, Palgrave. Macmillan, 2013.
 , *Rescuing the Bible*, Blackwell, 2007.